

平成28年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 芳賀 忠夫

喜多方市小学校農業科も今年で十年目を迎え、市内全小学校十七校の三年生以上、千五百人を超える児童の皆さんが、今年も小学校農業科の学習に取り組みました。小学校農業科の運営にあたり、九十七名の各小学校農業科支援員の皆様や会津農林事務所をはじめとした関係機関の皆様、県立耶麻農業高等学校の教職員・生徒の皆様や各小学校の先生方など、多くの皆様のご支援とご協力に対して心から感謝と御礼を申し上げます。

さて、今年度は豊川小学校の農業科実践の成果であるお米が、「米・食味分析鑑定コンクール国際大会（小学生の部）」において、その安全性とおいしさが認められ二年連続の金賞（最高賞）を受賞し、内堀雅雄福島県知事が稲刈りに来校されたり、「ふくしまブランド」のお米のコマーシャルに同校児童が出演したりしたことにより、本市小学校農業科への関心がさらに高まり、全国各地より視察や取材を受けることが例年より多くなりました。ここでは「なすことによつて学ぶ」精神に基づき、本市の基幹産業である農業を通して「豊かな心の育成」、「社会性の育成」、「主体性の育成」を目指していることをいつもお話しております。この作品集を読んでいただくことで、きっとその成果を十分に汲み取っていただけるものと考えております。この作文コンクールは、それら児

童の心や社会性・主体性の成長を検証するうえで、とても大切なものの一つであると考えており、第八回目を迎えた今年度は、千五百九点もの応募があり、該当する児童の約九十九%の皆さんが作文を書いていただけたことは、たいへん嬉しいことであります。

「いのちの大切さ」「他者への感謝」「支援員さんとの心の交流」「いのちのリレー」「農業の魅力」「初めて知った驚きのこと」「家族への思い」「ありがとうの様々な形」。これらはすべて、今回入賞された児童の皆さんの作文内容のキーワードです。これらの単語を見ただけでも心躍る思いがいたします。そこには、たいへん質の高い発見と感動、憧れと感謝、希望と決意などを読み取ることができると思います。

本来であれば、応募いただいた皆さん全員の作品をご紹介したいところですが、大賞を含む入賞者四十五作品の掲載とさせていただきますが、ぜひ、多くの皆様にこれら成果のたくさん詰まったこの作品集をお読みいただき、感動を共有いただければ幸いです。

おわりに、たいへんお忙しい中ご寄稿いただきました関東学院大学教授の佐藤幸也先生、慎重に審査をしてくださりました審査員の皆様方に心より感謝を申し上げますとともに、今後もこれまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

寄稿

「共感を育み共生の叡智を育てる教育」

「徳」のある教育を協働する喜多方の人々



関東学院大学理工学部 教授 博士 佐藤 幸也

学習指導要領改訂の目玉は道德の教科化です。これには多くの国民から批判や疑問が出ています。権力にある側が徳目を選び、教科書を作り、学習状況、つまり子ども達のこころを評価する、ということに違和感があるからです。

では、先生方や保護者、地域で暮らす人々は道德の教育は不要だと考えているのでしょうか。否です。だれもが優しく思いやりや勇気を持った人間になりたいと願っています。そして子ども達もそうした人々の中で育ってほしいと願っています。まして、今のように人々が孤立し、格差（地域間、個人間、学歴など）が拡大し、修復困難な時代では、世界中の人々が願っていることです。

かつて夏目漱石は、日本人の公德心のなさを批判しましたが、偉そうにしている人々に欠けているのは、徳と品です。だ

から、道德心を育てるのは大切なことなのです。それでも、良^い心^{こころ}がけや行^いいを強^いいられるような事には賛成できないと日本人は考えています。誰かの思いつきで、自分たちに都合の良いように言うことを聞き、命令通りに動くロボットのような人間をつくることに反対しているのです。それは、かけがえのないのちを踏みにじることだと本能的に、また歴史的に理解しているからです。押しつける道德はニセモノなのです。

もう一つ問題があります。価値観や生き方の多様化が進む世界で、どのような学校をつくり、子ども達の可能性を広げてやることができるのか、という思想（考え方）と方法がよくわからないことから来る自信喪失と親世代の悩みです。これだというモデルが見当たらない。地球上の生き物を大切にし、世界の人々と仲良くするためのルールや方法がよくわからない、ということです。それで、善^よき人間としての心のあり方も迷っているのです。

人生は夜の海で船出するようなものです。航海図も羅針盤もない。あるのは、「わたしはこうなりたい」という漠然とした希望^{きぼう}だけであり、自分を支えている家族や仲間への信賴^{しんらい}です。したがって、家族や友人、先生方とのきずな、未来に対する

楽観的な希望は、人生を切り拓いていくエンジンの役割を持つています。私たちは、這い這いからつかまり立ちをし、よちよち歩く姿を心から喜びます。幼いながらもいろいろ考えている子の様子を見て、「大きく育てよ」と七五三に参加します。どちらも主役は子どもだけれど、別の主役は祖父母です。人類は、長い共同生活を通じておじいちゃん、おばあちゃんから知恵や技能、文化を受け継いできました。祖父母の語りかけには、人間として成長し幸せになるための経験がこもっています。だから、児童文学（物語）は祖父母達からの孫達への贈り物としてそれぞれの宗教、民族、地域などで伝承され発達してきたのです。七五三の孫に寄せるまなざしは、自分が生きてきたことと孫をつなぐかけがえのない証なのです。でもこの愛情が、日本の学校教育ではいつの間にか遠ざけられてしまいました。地域で暮らす老人（敬称）にとって、子ども達は明日への活力であり慰めです。また、子育て世代にとって子ども達は、家族のかすがいだけでなく地域との架け橋です。その大切な子ども達を専門家として教え、さとし、励ましていく教師たちがいます。多少のそこばこや行き違いがあっても、これらが融合

していくことで互いに希望が生まれてきます。その喜びと希望が、子ども達の自立の旅、人生の航海に乗り出していくときのエンジンになるのです。その燃料は人々との信頼です。それをめいめい手にした子ども達が、自身で手入れをしながら仲間と支え合い波を乗り越えるのです。

この波には、個人的なものもあれば、学習する場や働く場にもあります。さらに言えば、日本社会や世界が荒波である場合も少なくありません。一人で乗り越えられる場合もあれば、国民的協力や世界の人々と助け合わなければならない事もあります。この助け合いや障害を乗り越える創意・工夫のことを政治と言います。だから、政治には徳が、善なる意志が欠かせないので。悪しき意思に操られる政治は、貧困や戦争を生みます。そして、権力やカネに目がくらみ、人々の苦しみさえもうけの対象とすることになります。

道徳とは、すべての人々が善なる（良き）意志によって人間らしい暮らしを互いに支え合おう、とする営みの総体です。力能的に言うならば、子ども達の中にある良き魂をより良く発揮せしめ、他の人々の幸せを願い笑顔を見たいと願う心に支

えられるべきものなのです。これが公德こうとくです。欧米の「善き市民」という考え方も同様です。これはとても難しいのです。まして、「教育は人材を育てる投資とうし」という考えで教育し、それに見合う道徳性を求めるのは偽物にせものです。子ども達や先生方への信頼しんらいと尊敬そんけいがあつてこそ道徳心は育つていくのです。

この問題を乗り越えるのが喜多方市「小学校農業科」です。決して言い過ぎではありません。瓜生岩子うりゆづに代表されるように喜多方には自然を敬うやまい他者をいたわり信頼し励ます心が継承けいしょうされています。子どもは天からの授かり物として受け止すこめ、その健やかな成長の為にみんなで協力する、という精神です。支援員さんや教育委員会の先生方、農協、市長や知事も農業科のサポーターです。なぜそれができるのか。それは理想を掲かげているからです。子ども達や互いを信頼し理想の教育をたゆまず実現していこうとする姿に共感し励まされるからです。こうした教育以上に尊いものはないと私は考えています。これこそが、道徳であり新しい科目「公共」でしょう。なぜならば、理想を共有し、それぞれの考えを出し合い、創意工夫に学びあいながら子どもや喜多方の未来を創つくっていく行為こういだからです。

この行為の積み上げが、喜多方の農業や文化をささえ、世界に誇ほこる歴史を作ってきたのです。歴史は英雄えいゆうの物語ではなく、ふつうの暮らしを大切にしてきた人々の生きた証あかしなのです。田んぼの小さなのちも大切にし、自然と人間が協力して出来てくるおいしい喜多方の米をみんなで食べる。そして地域の方々や自然に感謝を示す。子ども達はそれを「気持ちいい」「楽しい」「心がほんわかする」と表現しています。それに感動した全国の方々が「日本農業賞大賞・虹の架け橋賞」を贈おくったのです。一年間学習してきた農業科のクライマックスのひとつは稲刈りです。カエルやバッタを追いながら腰こしをかがめ、汗をぬぐいながら稲穂いなほを手に見上げると、心地よい風がからだを包み、飯豊の山々が見守ってくれている。生きている実感があります。

「小学校農業科」は今度の学習指導要領が目指している教育の目的を10年以上にわたって実践してきたのです。喜多方が全国に模範を示してきたと言っても良いでしょう。何より誇るべきは、それが皆さんの愛情によって支えられていることです。おそらくこの教育は、子ども達の心の中だけではなく長く日本の歴史に刻きざまれることになるでしょう。

入賞作品

目次

【大賞】

土のふとん

姥堂小学校

三年

大谷

千尋

12

米作りで学んだ感謝

加納小学校

六年

目黒

琴海

15

農業という仕事

熱塩小学校

五年

菅井

耕士郎

13

私たちにとって大切な食べ物に感謝

第二小学校

六年

大野

双葉

16

伝統野菜で広がる輪

慶徳小学校

六年

長谷部

優

14

【優秀賞】

自然の力に感謝

第二小学校 六年 土屋 心菜 17

米作りをして知ったこと

駒形小学校 六年 田中 由季乃 17

命の大切さ

姥堂小学校 六年 湯浅 和樹 18

命をいただくということ

高郷小学校 六年 石山 心南 19

ありがとうの気持ちを形に

塩川小学校 五年 五十嵐 和奏 20

農業の意味を考えながら

姥堂小学校 六年 大原 嬉博 21

農業の大切さ

第二小学校 六年 高橋 優太 22

農業科への思い

第三小学校 六年 久田 智也 22

「いただきます」に隠されたもう一つの意味

山都小学校 六年 齋藤 水月花 23

農業は人々をつなげる

熱塩小学校 六年 大竹 美沙希 24

【農業科賞】

大豆のたね植えからしゅうかくまで	第一小学校	三年	齋藤 詩	26
楽しかったサラダパーティー	第二小学校	三年	大森 和佳奈	27
七人の神様	第二小学校	五年	大島 夢音	28
野菜に対する自分の考え	第二小学校	六年	池亀 快	28
農業科の学習	松山小学校	六年	穴澤 花南	29
農業科っておもしろい!!	豊川小学校	三年	折笠 華子	30
農業と笑顔	慶徳小学校	六年	石田 あめり	31
農業のすばらしさ	加納小学校	五年	原 太一	32
ぼくが感じたこと	堂島小学校	三年	塚原 凜	33
農家の人に感謝を	塩川小学校	六年	進藤 綾乃	33
のうぎょう大好き	駒形小学校	三年	大石 舞花	34
初めての農業科	熊倉小学校	四年	赤城 はるか	35
農業に感謝	駒形小学校	五年	小滝 諒真	36
食べ物の大切さ	駒形小学校	六年	五十嵐 千冬	37
収かくの喜び	第一小学校	五年	鈴木 秀隆	38
田植えと稲刈りを通して学んだこと	上三宮小学校	五年	川勝 愛斗	39
心をこめて農業を	第三小学校	五年	山 凜太郎	40
最後の一粒まで感謝して	関柴小学校	六年	山田 涼心	40

作物との出会い

熊倉小学校 六年 伊藤 来麗愛 41

はじめての大根作り

加納小学校 三年 原 武 42

農業活動を通して

塩川小学校 四年 平宮 蒼唯 43

みんなでやりとげた米作り

塩川小学校 五年 目黒 楓香 44

感謝の言葉「いただきます。」

山都小学校 六年 田代 萌衣 45

おいしい大豆に感しやして

第一小学校 三年 大八木 壱征 45

野さい作りで感じたこと

第一小学校 三年 柳沼 陽斗 46

農業科、ばんざい！

上三宮小学校 六年 大塚 桃佳 47

これまでの農業科・・・

豊川小学校 六年 茶木 真由花 48

農業の楽しさ

豊川小学校 六年 小森 奏 49

農家の人の素晴らしさ

姥堂小学校 六年 新國 恋羽 50

農業科の学習で学んだこと

山都小学校 五年 渡部 遥華 51

編集後記

52

【大賞】



土のふとん

姥堂小学校 三年 大谷 千尋

今日は、のうぎよう科で育ててきたにんじんをほる日です。わたしは土の中で育っているにんじんを見たことがないので、どんなにんじんができているのかとても楽しみでした。まわりの土をシャベルでほってひっぱると、オレンジ色のにんじんが出てきました。土はふかふかしてあったかく、きもちよかったです。太いにんじんがいっぱいありました。

ほったにんじんを家に持ち帰ると、お母さんがみそしるに入れてくれました。みんなで食べているとき、おじいちゃん、
「おじいちゃんが作ったにんじんより大きいね。畑の土が
いいんだね。」

と、おどろいていました。わたしは、おじいちゃん作るにんじんと、小学校の畑で作るにんじんは、どうして土がちがうだけで大きさがちがうのか、ふしぎに思いました。

畑の土は、わたしの生活でいうとねる時のふとんだと思います。わたしも毎日ごはんを食べて、ふとんでねて大きくなりますが、やさいも同じだと思いました。春にまいたたねは、赤ちゃんです。めが出るまでは、やわらかい土のふとんの中でねて、水をもらって大きくなります。その時の土のふとんが、やわらかくいふとんだといいやさいができるのだと思います。

小学校の畑は、のうぎよう科の先生が、たねをまく前いたがやしてくれます。とてもよくたがやしてくれるのでとてもよい土になります。わたしたちはその土のふとんにたねをまいたりなえをうえたりします。やさいを大きくするためにはたねも大切ですが、たねをまくための土のふとん作りも大切だと思いました。来年は、土をよくたがやしてふかふかの土を作りたいと思いました。

のうぎよう科をべん強して、やさいのことだけでなく土の大切さも学ぶことができました。これからもおいしく育てるひみつを考えながら、やさいを育てていきたいと思っています。



農業という仕事

熱塩小学校 五年 菅井 耕士郎

命という言葉聞けば、みなさんは、どう思いますか。普通に考えれば、大切ということが上がります。僕がこのように作物の命を考えるようになったのは、どろんこ祭りの後からです。どろんこ祭りとは、僕が通っている熱塩小学校の田植えの前に行われる米の健康と、災いをよせつけないための行事です。どろんこ祭りは、紙に願い事を書き、みこしにつけて、みこしをかつぎながら、田植え前の田んぼを歩く行事です。僕は今年、このような願い事を書きました。「去年よりも、おいしい黄金色の米になりますように」でも一つだけ疑問に思いました。それは、この願いを誰に送っているのかという事です。この事をよく考えてみたら、願っている相手は神様だと分かりました。

でもなぜ神様にお願いするのでしょ。それは自分達では守りきれない物があるからです。僕達は種をまいたり、田んぼになえを植えたり、肥料をあげたり、ころばしで雑草を取ったりして、稲の成長を手助けする事はできます。でも、天気を変える事はできません。雨がふり続くと、稲の成長に影響が出たり病気が発生したりします。今は水路が整備されて困りませんが、昔は雨が降らないと水不足で稲が枯れてしまいました。秋に台風が来ると稲がたおれてしまいます。そんな時人は、神様に祈ることしかできないのです。僕の家も農家です。おとうさんが、毎日天気予報を見ている理由が分かりました。農業は、自然の影響が大きく、自然と向き合う仕事だと改めて分かりました。

今年の、小学校の米は無事に育ち、おいしくできました。僕は、自分の家の農家の四代目として、継ぎたいと思っています。僕は農作業を行う時、命とはどういうものかという心と農業とは「作る」という事でやりがいのある仕事なんだということを頭に入れ、これから大人になっても、米づくりをしていきたいです。農業科の学習を通して、今年もまたそう思いました。



伝統野菜で広がる輪

慶徳小学校 六年 長谷部 優

「今日は、慶徳たまねぎの収穫をお手伝いします。」

と先生がおっしゃった時、私の頭の中は、はてなマークでいっぱいでした。「慶徳たまねぎ」ってなんだろう。地域にそんな野菜があるなんて知らなかったという気持ちと期待で畑へ行きました。

支援員さんから慶徳たまねぎの説明をしていただきました。慶徳たまねぎとは、一時とぎれそうになった野菜ですが、ある慶徳町の農家の方が慶徳たまねぎの種を持っていたことで、復活できた野菜です。とても大きくて形がよく、中はみずみずしくてフルーツのようなあまみがあるのが特ちょうです。その後調べてみると、淡路島の「泉州たまねぎ」をこの喜多方市へ持ちこみ、品種改良をして「慶徳た

まねぎ」ができたということが分かりました。収穫する時は、手作業で全で行うので、こしがいたくなってきたり、うでがいたくなってきたりして、収穫の大変さがよく分かりました。

そして何百個という玉ねぎの収穫が終わり、土だけしかない畑を見わたすと、体のつかれより達成感とうれしさが上回り、農業はなんてこんなに楽しいのだろうと思いました。

そして秋になり、来年もこの収穫の喜びが下級生にもひろがるよう、学校の畑にも慶徳たまねぎの苗を植えました。慶徳たまねぎは、育てることが難しく簡単に育てることができません。だから私は、一つひとつの小さな苗に気持ちこめて、ていねいに植えていきました。

私は地域の伝統野菜の収穫と栽培を通して、農業の大変さと楽しさを実感し、農業について学ぶきっかけをつかみました。そして、農業や地域の野菜、お米への関心が高まりました。このような体験は地域の方の協力があつたからできたことです。私は「伝統野菜の価値」や「農業のすばらしさ」「地域の連けいの大切さ」を伝えていきたいと思っています。



米作りで学んだ感謝

加納小学校 六年 目黒 琴海

私は、米作りプロジェクトで感謝の気持ちを学ぶことができました。

五・六年生の二年間で米作りを学習しました。この学習で前とはちがって食べ物に対する思いが強くなりました。特に「ありがとう。」と言う気持ちが強くなり、そのきっかけとなったのが米作りを教えて下さった先生方の言葉にありました。

ある作業で支援員さんは作業前に、

「一つ一つの作業を心をこめて、ていねいにやって下さい。」

と言いました。最初は、心でおいしくなるように作業をするのかと思っていました。でも、水中生物調査で東京から来た先生が虫をつかまえ、虫の名前を調べた後に、

「虫も生き物です。自然を守つてもくれます。だからにがしましょう。」

と言った時に初めて心をこめるということが分かりました。自然のめぐみと地域の方々のおかげでおいしくお米ができていることを忘れてはいけなく、環境と地域の方々の手で助けてもらっているので感謝の気持ちを心の中いっぱい、いっぱいこめるとだと学べました。

「たったそんなことだけで」

と思う人がいるかもしれないけど、でも私はこの一言があることでどんなに楽しくなるのかを実際に作ったから知っています。

十一月には、赤飯配りがありました。一人暮らしのお年寄りに渡しに行きます。五年生の時も六年生の時も、とても楽しみでした。それは、一生懸命作ったお米を配り「毎年ありがとな。」や「おいしそうだね。」などおほめの言葉があり、とてもうれしく思います。

私は、五・六年生の二年間でいろいろな感謝を学びました。活動している時は自然への感謝、赤飯配りをしている時は、今まで助けて下さった方への感謝など、強く学ぶことができ、感謝は自分もふくめ全体に込められていることを学びました。



私たちにとって大切な食べ物に感謝

第二小学校 六年 大野 双葉

「この野菜おいしくないから食べたくない。」

これが小学生になる前の私です。私は、見た目や味、においで好き嫌いをしていて、お母さんに食べなさいと言われても、ゴミ箱に捨てるか、お母さんに食べさせてもらってもすぐに口から出して捨てていました。でも今の私は、別人だと思うほど、ちがくなりました。理由は、四年間の農業で食べ物の大切さを知り、食べ物に感謝をしないといけないなと思ったからです。

私は、この四年間の農業で、ある大切さを一つ知りました。

その一つというのは、こんな大変ないろいろな作業を毎日、農家の方々が思いをこめて、人と同じようにその食べ

物の命を一つ一つ、大切に育ててくれていることです。私は農業科でそのことを学び、野菜がおいしくないから食べられないなんて言えないなと思いました。私はその命の大切さを知らないくせに、捨てていることになります。だから今の私はその大切な命に、

「いただきます。」

と必ず大きな声で言うてから、一日、三食を食べています。そして、食べ終わったら、また大きな声で、一つ一つの大切な食べ物の命に、

「ごちそうさま。」

と必ず言います。

私は今言った一つだけけどこんな事を大切にして、農家の方、そして食べ物に感謝して、ご飯を食べています。

「この野菜おいしいね！」

そう、これが今の私です。私はお米の一粒も残さずサラダなどの切れはしも残さず食べるようにしています。

「いただきます。」

「ごちそうさま。」

今日も、そう言って、食べ物の大切な命、一日三食を食べます。私たちにとって大切な食べ物、一つ一つの命に感謝をしながら…。

【優秀賞】

自然の力に感謝

第二小学校 六年 土屋 心菜

「自然の力ってすごい。」

これが私の今の気持ちです。六年生の農業科の勉強、この活動で私は大切なことを二つ学ぶことができた活動となりました。

今回の農業科の活動は私の小学校生活の中で最後となります。せいっぱい取り組みもうという気持ちでいっぱいでした。でも一つの作業がおわると（がんばった。）という気持ちではなく、農業、いやそれよりも自然というものに関心をもつことができました。そして、今育てている作物は私たちだけで育てているのではなく私たち以外の小さな生き物、自然とともに育てていることに気づくことができました。そして私たちを明るく照らし、作物をぐんぐん育ててくれる太陽がある空を見上げたり、作物にいろいろな栄養をあたえ育ててくれる雨のことを考えているとなぜか感謝の気持ちでいっぱいになり、私はとても大切なことに気づくことができました。

そしてどうして三年生から農業を続けているのに大切なことに気づけなかったんだと疑問の気持ちにもなりました。でもやっぱりこのことは私が六年生だからこそ気づけたのではないかと私は思います。

六年生だからこそ気づけた大切なことがもう一つあります。それは農業というものは、失敗を何度も積み重ねて今までで最高の作物ができることです。私も実際に体験しました。みんなで育てたトウモロコシのほとんどがカラスに食べられてしまいました。でもそこで終わったら、ただの失敗です。（そこからまたちよう戦すればまたいい作物ができるかもしれない。）そう私は前向きに考えていました。この二つのことは私が生きていく上でとても大切なことです。例えば何事にも前向きにちよう戦すること。そして自然をうやまうこと。この二つの行動をすれば、私の人生は作物のようにぐんぐんのびていくと、私は思っています。

米作りをして知ったこと

駒形小学校 六年 田中 由季乃

私たちは、今年も農業科で米作りをしました。今年は二

年目なのに、知らなかったことがいくつありました。

田植えのときに農業科支援員の辺見さんが、苗は三、四本ずつ植えるようにと教えてくれました。私は、「どうしてもなんだろう」と思いました。辺見さんが、どうして三、四本植えるのか実験しようと言ってくれ、苗を一本、三本、十本植え、それがどうなっていくか比べていくことになりました。

今年の米作りで分かったことの一つ目は、機械よりも田んぼに入って田植えをしたり、転ばしを使って草取りをしたりした方がいいのは、土の中のガスを抜くことができるからということです。

二つ目は、米の苗はある時期に株分けしてくきの本数が増えるということです。これを分げつということを知りました。草取りのときに調べたら、一本、三本、十本の苗の数は、それぞれ十五本、二十一本、二十七本になっていました。びっくりしました。

三つ目は、田植えのときに疑問に思った、どうして苗を三、四本植えたほうがいい理由です。これは稲刈りのときに分かりました。

それぞれのくきの本数とその米粒の数を調べました。すると一本は二十七本で三千三百八粒、三本は三十四本で三

千五百五十粒、十本は三十七本で三千四百三十粒でした。これだけだと一本の苗を植えた方がよさそうなのですが、苗一本だけだとちゃんと育つかどうか分かりません。それを考えると、三本の苗を植えることで、米粒の数も実の入る具合もよくなることが分かりました。

今は機械があつて苦労することがなくできるから、手作業する人はあまり見ません。でも、できたときの達成感はずいので、農業科で米作りをしてよかったです。地域の人に教わりながら、昔の知恵も生かしながらできるので、二年間米作りができたこと、本当によかったと思いました。

命の大切さ

姥堂小学校 六年 湯浅 和樹

ぼくの家では、米や牛を育てています。おじいちゃんから、こんなことを聞いたことがあります。

「牛には命がある、命っていうのは人間だけが持っているものじゃない。牛以外の動物にも植物にもみんな命がある。食べる前に『いただきます』というあいさつがあるのは、命をいただきますという意味なんだよ。」

ぼくは、この話を聞いて、農業科で育てる作物にも命があるかもしれないと考えるようになりました。

五年生の時に、農業科の時間に手作業で田植えをやりました。最初は、「機械でやればいいのに。」と思っていました。でもやっていてだんだん楽しく感じてきました。やり終わると達成感がありました。

なえがどんどん伸びるのを見ているとうれしく思えました。命を育てるということがわかった気がしました。

そして学校で育てた野菜は家で食べる野菜と比べると一味違うような気がしました。水をやり、草をぬいて自分たちで育てたからだと思いました。

農業科はあまりおぼえなくていいから楽だと思っていました。でも、これから生きていくための喜びや楽しさ、そして命の大切さが学べる学習だと思うようになりました。

これからは、ぼくの家でやっている、牛のえさくれや植物の世話を、命の大切さを教えてくれたおじいちゃんといっしょに、育てていきたいです。そして、作物を育てる時は、一つ一つ大切に自分の手で植えていきたいです。

食べる前、食べた後にはしっかりと、「いただきます。」「ごちそうさまでした。」と言える人になりたいと思います。

命をいただくということ

高郷小学校 六年 石山 心南

私は農業ということを学んで分かったことがいっぱいありました。

一つ目は、米づくりのやり方です。私は、今年で二回目でしたが、やはり田植えは、難しかったです。講師の方々に教えてもらいました。田植えをする時には、手で苗をつまんで土の中にズボツと入れる感じでやります。そして間をとることです。間をとらなければ稲刈りをする時に大変だそうです。稲刈りの時には、稲をつかんでカマで下の方を切ります。それを何個か集めてひもでしばります。そしてたら稲を干す棒に半分半分にやってかけます。おいしい米ができますようにと願って作りました。

二つ目は、『命の大切さ』です。私達は、何げなく給食を食べていました。しかし私は、この命の大切さを米づくりを通して学びました。給食は、様々な材料肉・野菜・魚などの命をもらって食べています。肉だったら牛、ぶた、鳥の命をもらって食べています。私が大好きな肉も大事に食べなくては、なりません。例えば自分が牛だったらと考えると、

「殺されたくない！食べられたくない！」

と思うと思います。けれどもこういうことを思っている牛たちは、殺されてしまうんです。だからこそ命のありがたみを考えてこれからは、食べていきたいなと思いました。三つ目は、ご飯を食べる時にあいさつをする、

「いただきます。」

の意味を考えて言いたいと思いました。動物や野菜の命をもらうので感謝していたいと思いました。

農業科で学んだことを、これからの生活に生かしていきたいです。

ありがとうの気持ちを形に

塩川小学校 五年 五十嵐 和奏

私はお米が好きだ。家で食べているお米はおじいちゃんの家からもらっている。おじいちゃんの家ではお米を作っているからだ。でも、実はまだ一回もお手伝いをしたことがない。だから私はいつも何だか申し訳ない気持ちでお米をもらっていた。

今年の農業科は「米作り」だ。私は内心やったと思って

いた。初めてだから楽しみということもあったが、米作りについて学習できるという気持ちのほうが強かった。

学校での最初の作業は五月に行われた「田植え」だった。苗の色、さわり心地、土の感覚。どれも初めての感覚におどろいた。そして十月には、稲かりを行った。

農業科では、米作りと同時進行でお米の作り方についても調べた。さいばいの条件や手順、そして「米」という漢字には、「八十八もの手順や手間がかかる」という意味があることも学習した。

ちよつと待つて。「八十八？」

私は、正直おどろいた。私のした仕事といえば、田植えと稲かりの二つだけ。手順を調べてもそれほど多くはなかった。そこで、私は米作りのプロであるおじいちゃんに聞いてみることにした。すると、お米作りは田植えのはるか前から始まっていることが分かった。例えば、田んぼをたがやしたりする田作り、育苗、じよ草、水の管理。まだまだある。

私は、農業を少し簡単に見ていた。私がお米のことを忘れていても、その間だってお米は命をつなぐために生き続けている。私たち人間は、その命をつなぐために生き続けている。私たち人間は、その命の営みから目をそらしては

いけないのだ。お米は命をつなぐために一生けん命生きている。私たちも、自分の命をつなぐためにその命をいただいている。農業はまさに「命」の仕事なのだ。

私の家は、おじいちゃんの家からお米をもらっている。来年こそ、ありがとうという言葉だけではなく、今年の農業科の学習を生かしてお手伝いをしようと計画を立てている。

農業の意味を考えながら

姥堂小学校 六年 大原 嬉博

「いただきます。」

野菜や米を食べる時、何も考えずに食べている自分がいました。毎日、何気なく食べている野菜、米。それらの中には、たくさんのおいしさがつまっていることを、この農業科で気づきました。

小学校に入学したとき、初めて農業に出会いました。はじめは、何をするのか全く分かっていませんでした。ただ、種を植えて、食べるだけでした。そんな軽い気持ちでやっていました。

今年は、小学校最後の農業科です。作物を育てる。作物を毎日食べる。ぼくは、農業や食べることを意味を考えながら農業科に取り組みました。

去年、水が足りなくてほとんど収穫できなかった里芋には、土がかわかないようにたつぷりと水をくれました。収穫祭に全校で食べるねぎは、栄養を取られてしまわないようにこまめに草をむしりました。今年はいつもとより心を込めて作物を育てました。

ぼくは、六年生になって、新たに、農家の人の苦勞、作物への愛情が分かったような気がしました。作物には農家の人の思いや愛情がたつぷりとつまっているのです。だから、おいしい野菜や米ができるのです。みんなで作った野菜を食べる収穫祭、ぼくは、ひとつひとつの食材の中につまっているものをかみしめながら食べました。

ぼくが農業科で体験したこと、それは、農家の人への感謝の気持ちをもちたいということ。そして、作物をいただくことへの感謝の気持ちを忘れないということ。だから、

「いただきます。」

と毎日声に出し、おいしく食べ物をいただきます。そして、その愛情が詰まった作物のように、僕自身もまっすぐ成長していきたいです。

農業の大切さ

第二小学校 六年 高橋 優太

ぼくが四年生の時に、転校してきて、おどろいたことがあります。それは、時間割表に「農業科」というものがあったのです。ぼくはびっくりしました。前通っていた学校ではなかったので、一体どんなことをするのか、不思議に思いました。

そして、楽しみにしていた農業科の授業のとき、はじめは種うえをしたと思います。こんなことをやるんだと、とても次の授業が楽しみでした。調べてみると、「農業科」という科目は、とてもごくわずかな一部の地域でしか行われていないことが分かりました。ぼくは、農業科がとても好きで、とても勉強になるし、ぼくたちが毎日なげなく食べているごはん、野菜、すべての農作物は、農家の方々がとても苦勞して作ってくださっているんだと、改めて感謝して食べられるようになりました。

五年生では、お米を育てました。田植えは田んぼがともグチャグチャしていて、はじめてのかんしよくでした。コツをつかむと、はやく植えられるようになりました。いねかりの時期になると、いねがぐんぐんのびてきて、みんな

なきれいな茶色になりました。みんなでおにぎりにして食べたのは、最高においしかったです。

そして今年はニンジン、ジャガイモ、トウモロコシ、スイカを育てました。すいかは陸上大会の時にたべました。暑い中食べるスイカは、とてもおいしかったです。

中学校になったら、祖父が家庭菜園をしているのでそれを手伝いたいです。まだ、「農業科」は全国にはあまり広がっていないので、たくさん地域にたくさん広めて、農業の大切さ、ありがたみ、農家の方々の苦勞、食べ物に対する感謝などを広めるためにも、農業科を全国の小学校でとりいれてほしいです。そうすることで、農家がふえ、日本の食料自給率がアップするかも知れません。なので、農業科を広めていきたいです。

農業科への思い

第三小学校 六年 久田 智也

ぼくは、六年間、授業で農業を学んで、これは大切だと思ふ事があります。それは感謝の気持ちです。ぼくは、ご飯を食べるとき感謝の気持ちを持たずに食べていました。

そのころは一、二年生でした。それから四年生になり、松の子でじやがいも植えをしていた日、六年生に、

「ごはんがおいしいのは、農家の人達ががんばって作ったからだよ。だから感謝の気持ちを持って食べるんだよ。」

と言われました。その日の夜ごはんの時、

「今までぼくは感謝の気持ちを持った事がなかったな。どうしてがんばれるんだろう。」
と思いました。

あるテレビで、農業の事が放送されました。インタビューでなぜがんばって野菜を作っているのですかと聞いていました。すると、

「みんなに自分の作った野菜を食べておいしいと言って笑顔になってほしいから。」

と言っていました。ぼくは、

「え、自分が食べるからではなく、みんなにおいしいと言って笑顔になってもらうためなの。」

とすぐびっくりしました。それで、次の日から、水やりを丁寧にやっています。そうしたら、五年生から、
「今はふざけられないきちんとやっているんだ。なんでどうしたの。」

と言われました。ぼくは、

「ぼくも、がんばって作って班のみんなでおいしいと言われる野菜を作りたいんだ。」

とニュースと同じ事を言いました。その後、収穫したじやがいもやサツマイモはとても大きかったです。収穫祭の日、ぼく達はカレーを作りました。食べると、すごくおいしかったです。

ぼくは、六年間農業科をやって、すごく良かったです。今では、感謝の気持ちを持って食べています。大人になって農業をする時は、適当ではなくきちんとやりたいです。

「いただきます」に隠されたもう一つの意味

山都小学校 六年 齋藤 水月花

「いただきます。」には命をいただくことの感謝の気持ちがある。このことは昨年、農業科の学習を通して学んだ。しかし、私はもう一つ感謝しなくてはならない重要な存在があったことに気づかされた。今年の農業科の学習は、その大事なもう一つのことを教えてくれた。

私の学年では、スイカを育てていた。暑い日差しが照り

つける畑の中、受粉や孫づる取りをした。私は、

「こんな暑い中畑仕事なんていやだな。」

と言いながら作業をしていたが、支援員さんは何も言わず、ずっと作業をこなしていた。その姿を見ると、弱音をはかずに作業をする支援員さんはたくましくすごいと思った。そして、いつもこういう仕事をしている支援員さんや農家の方は大変だなと感じた。

スイカの収穫が終わり、先生の話を聞いていたら、こんな言葉が耳に入った。

「支援員さんは、みんなが畑に行かなかったときも毎日スイカのお世話をしてくださったんですよ。」

私は、どうしてそんなに作物を大事に育てるのだろうと思いついてみた。すると、支援員さんは、数々の思いを背負って作物を育てているのだとわかった。

みんなにおいしいスイカを食べてもらいたい。作物には命があるから一つでも枯らすことはできない。こんな気持ちをもって毎日畑仕事をしていることに気づき、私は改めて農業の大変さを知った。台風が来たり、雨が降ったりしても命を育み続ける仕事。農家は、ただ作物を育てるのではなく、たくさんのおもいをもって仕事をしているのだと知った。

ありがとう。全ての農家さん。私達が作物を口の中に入れるまで、様々な苦労があり、大変な作業がいろいろあったことでしょう。私は改めてそのつらさを感じました。「いただきます」には農家さんへの感謝もある。このことをわすれず、今日も元気にいただきます。

農業は人々をつなげる

熱塩小学校 六年 大竹 美沙希

私の父は、小学校の時に私と同じ熱塩小学校に通っていたそうです。私は父に、

「お父さんが子どもの時、今と同じように農業の学習があったの。」

と聞いてみました。すると父は、

「お父さんが小学校のころは農業学習はなかったな。中学三年生の頃に農業が始まったかな。」

と話してくれました。私は、この熱塩小にもともと農業学習がなかったことに驚きました。そして、毎年収穫した物をみんなでいただく収穫祭も、昔の熱塩小にはなかったと思いました。そう考えると、私たちは収穫した喜びを祝い、

野菜やおもちを食べることができると感謝したいです。

えるようにがんばります。

私は、農業学習が大好きです。農業は種をまいてから収穫するまでお世話をして育てます。そのすべてが私はとても楽しいです。

今年、五・六年生で育てた小豆でお赤飯を作り、一人暮らしのお年寄りの方々に届けました。この「笑顔の赤飯届け」は六・七年前に始まったそうです。

地域のお年寄りの方々に、私は笑顔で赤飯を届けることができました。赤飯をお年寄りの方に渡したときに、

「ありがとう。」

と言われ、赤飯を作って届けることができて本当によかったと思いました。

その数日後、

「赤飯、とってもおいしかったよ。ありがとうね。」

と、にこにこして言うてくださる方もいました。私は赤飯を届けることで、地域の人との関係もより深まるんだなと思いました。

私にとって農業は、みんなと協力して育てる楽しさを味わえるすばらしいものです。また、いろいろな人との関係を深めることができるのだと気づかされました。

中学校でも、みんなと協力して地域の方々に喜んでもら



【農業科賞】

大豆のたね植えからしゅうかくまで

第一小学校 三年 齋藤 詩

ぼくは、大豆のたね植えからしゅうかくまで、地いきの先生に教えていただきながら育ててきました。

とうふ、なつとう、みそ、しょうゆ。大豆から作られる食品はたくさんあり、ぼくの家の食事にはかせない物です。安くおいしい大豆せい品は、ぼくたちの体にとってもよいものだと思っていましたが、育てしゅうかくするまでに、たくさんの時間とくろうがかかることを、体けんしてはじめて知りました。

大豆を育てることと一番おどろいたことは、大豆のたねをひとつぶずつポットに植えて少し大きくなるまで育てるところです。ぼくは、大豆のたねをそのまま畑に植えるのかと思っていました。ところが、ぼくが想像していたよりもずっといいねいに育てていました。ひとつぶずつポットに植えた大豆のたねに毎日かかさず水をあげ、一週間ぐらいでようやくとても小さなめが出ました。でもまだ畑には植えかえません。地いきの先生は、めが三センチメートル

ルぐらいのびたぐらいがちょうどいい植えかえ時だと教えてくれました。よい食物を育てるためのタイミングを見きわめることができる地いきの先生やのう家の方々は、すごいと思いました。

夏休みが終わってひさしぶりに畑へ行ってみると、小さかった大豆のなえは、ぼくのむねまでに大きく育っていました。夏休みの間も先生が水をあげたり、草むしりをしたりと、せわをしてくれたおかげだとかんしゃの気持ちになりました。

十一月十八日、ぼくたちは大つぶに実った大豆をたくさんしゅうかくすることができました。ぼくは体けんを通して、どんな食物を育てるにも、人の手がかかり大へんだということや、心をこめてせわをすることでおしく作るということができるということを学びました。だから、食事の時には、心をこめてあいさつをし、ごはんをのこさず食べていきたいと思います。



楽しかったサラダパーティー

第二小学校 三年 大森和佳奈

「わーおいしい。」

農業科の時間にサラダパーティーをしました。

私たち、三年生はみんなでじゃがいもを育てました。そのみんなで育てたじゃがいもでおいしいポテトサラダを作ったパーティーをしました。

じゃがいもは、小さいものや大きいもの、ゴツゴツしているものなどいろいろな形をしていました。

はじめに、皮をむきました。いろいろな形をしているのでピーラーでむくのはむずかしかったです。でも、どのじゃがいもも、むいていくうちに白くてつるつるできれいにむけました。ほんのりあまいにおいがしました。

じゃがいもを畑にうえた時は、こんなに大きたくさん育つと思っていませんでした。一、二年生の時のさつまいもを育てた時は、葉っぱのついたなえをうえたけれど、じゃがいもは、じゃがいもを小さく切ったものだったからです。本当に育つのかしんぱいでした。

だけど、さつまいもの葉っぱやくきはつるがよこにのびていたけれども、じゃがいもの葉っぱやくきは上にむかっ

てぐんぐん大きくなりました。葉っぱがぐんぐんのびると「土の中のじゃがいも大きくなっているかなあ。」

とわくわくしました。お花も見ることができました。色はむらさきでした。小さくてとてもかわいいお花でした。じゃがいもつてお花がさくんだなあとはじめて知りました。

みんなで育てたじゃがいもがゆであがってマッシュヤーでつぶすと教室がポテトのかおりでおなかへってきました。マヨネーズとハムとキュウリを入れてできあがりしました。今まで食べたなかで、一番おいしいポテトサラダでした。

お店に行くとじゃがいもはすぐ買えますが、みんなから作ると、とてもたいへんなのが分かりました。でも、育てるのはたいへんだったけど、いろんなことが分かりました。



七人の神様

第二小学校 五年 大島 夢音

ぼくの家は、農家ではありません。なのでぼくは生まれて初めて農業の授業で米づくりを体験しました。テレビでは、見た事ありますが苗を手にとったのも初めてでした。

長ぐつをはいて田んぼの中に入ったしゅん間「グチャグチャ」して気持ち悪くて長ぐつの中に水が入らないか心配したけど、田植えに夢中になり最後の方は、長ぐつの中まで泥が入っていました。田植えが終わって休みの日に見に行ったら、苗は大きくなっていてとてもうれしい気持ちになりました。

ぼくにとって米づくりは何もかもはじめての体験でした。そして米づくりをしていて農家の人の気持ちがよく分かりました。米づくりには、水の管理・雑草を取り除いて病気になるらないように注意して悪い虫がつかないようにする事が大切だそうです。雨が多すぎても育たないし少なすぎても育ちません。

お米一つぶ一つぶには、沢山の農家の人の苦労があることが分かりました。

ぼくは、小さいころ「お米には七人の神様がいるからお

米をそまつにしては、いけない。」とおばあちゃんからよく言われていました。その七人の神様は、土、風、雲、水、虫、太陽、作る人だそうです。そして米という漢字が出来たのは、米を作るのに八十八個の作業がある事から「米」という漢字が出来たそうです。

米づくりの体験でその意味がよく分かりました。これからは、感謝しながら食べたいと思います。

野菜に対する自分の考え

第二小学校 六年 池亀 快

ぼくは、農業科で絶対に大切な事を見つけました。それが何だかわかりますか？それは農業で大切な手間ということです。

農業にはたくさんの手間があります。耕す、まく、ぬくなどたくさんあります。その中で草むしりが大切だとぼくは思いました。なぜならば、ぼくが、大根の種を植えました。一カ月もたてば草がいっぱい生えているでしょう。もししたら、みなさんは草むしりをしますよね。ぼくは、六年

生の時まではその作業を、「めんどくさい。なんでこんな事をやるんだ。」とずっと思っていました。しかし、六年生の二学期に祖父の家に行ったら、祖父が一所懸命に草をむしっていました。ぼくはその姿に感動しました。暑い中草をひたすらむしっていたのでぼくは、大変な作業だから手伝い、その時ぼくは、心の中でこう思っていました。「こんな大変な作業を全て乗りこえるからこそおいしい野菜ができるんだな。」

と改めて強く思いました。その日から野菜に対する自分の考えが変わりました。どんな風が変わったかというと、草むしりの時は、弱音をはかずに、根気強くむしり、間引きの時は、どっちが良い方なのかよく考えてぬきました。この二つだけではありません。祖父の姿からたくさん学びました。

ぼくは、農業をやる時に毎回思うことがあります。それは、祖父の姿を見たときに、農業はたくさんの手間を乗りこえたからこそ、おいしい野菜ができるんだと毎回思いました。今だけでなく、農業とむきあったときはいつも思いたいです。これからの生活で野菜とたくさん出会うと思います。だから野菜を残さないで食べたり、育てたりしたいです。また、野菜が食事等に出てきたならば、

「おいしい野菜をありがとう。」
と作ってくれた人への感謝の気持ちを忘れずに野菜に対する考え方をこれからも改めて、作ってくれた人への感謝を忘れないで、生活していきたいです。

農業科の学習

松山小学校 六年 穴澤 花南

農業科の学習で育てた野菜は、大根、里いも、さつまいもです。私が、特に心に残ったのは、大根とさつまいもです。

大根の種をまいた時、大根の種があさがおの種より小さかったのにおどろきました。一ヶ所に三つぶもまきました。大きさは、米つぶの半分くらいで、その小さな種が、人の顔より大きい大根になると思うとすごいと感心します。

大根を収かくする時、私がぬいた大根が、おもしろい形になっていたの、みんなに笑われました。中には、大根なのに、人参のような大きさの物がありました。大根の葉っぱも立派でした。

さつまいものなえを植える時、一年生といっしょに植えました。農業科の人のアドバイスに従ってさつまいものなえを植えました。

農業科の人に、

「さつまいものなえは、ねかせるようにして植えてください。」

とアドバイスをもらったのでその通りにしたら、大きい立派なさつまいもができました。

さつまいもを収かくする時に、みんなで協力してさつまいもをほっていたら、まん丸なさつまいもが出てきでござりました。ものすごく多い量のさつまいもを収かくできてよかったです。幼虫やみみずがいて私が友達に見せたら、「みみずがいるっていうことは、ここの土はいい土なんだね。」

と言われ、虫が土の中にいると、いい土だというしうことになることが分かりました。

農業科の勉強をして気づいたことは、みんなと協力して、育てた野菜は美味しいということです。これからも、いろんな野菜を育てていきたいなと思いました。

農業科っておもしろい!!

豊川小学校 三年 折笠 華子

今年初めて体験する農業科。先生に

「えだ豆となつとう豆を作りますよ。」

と言われた時、私は「ああ。なんてこった。」と思いました。だって畑は、土をほればミミズやナメクジが出てくるし、草むしりをすれば、イモムシやゲジゲジが出てくるからです。私は虫が大の苦手なのです。

さいしょに畑に行った時、畑の先生といっしょに豆のつぶを植えました。土をほると思った通り、ナメクジが丸まっていた。気持ち悪いのをひっしでがまんして、やつと豆のつぶを植えることができました。豆は植えたままではうまく育ちません。私はそれから何度も畑に行くことになりました。草をむしたり、しゅうかくした後は「とうみ」という道具で豆にまざったゴミをとばしたり、たくさん虫に出会うことになりました。私たちの豆は、安全で安心して食べられる豆になるよう、農薬など使わずに育てたので、たくさん虫がいたのだと思います。何と、しゅうかくしたえだ豆をゆでて「さあ、食べるぞ」というお楽しみやしゅん間にも、虫が出てきました。ほけんの先生がわ

らいながら「虫さんが、いっぱい出て来るほどおいしいんだよ。」と教えてくれました。なるほど、えだ豆は虫の気持ち悪さをわすれるほど、おいしい味でした。

白糸なっ豆の社長さんは、私たちが育てた大豆を使い、なっとう教室をひらいてくれました。社長さんには、なっ豆のパックづめをグループできよう力して行かうかつ動を通して、仕事のきびしさを教えていただきました。なっとうも、今までにないくらいおいしくて、家族にも「おいしい。」とよろこんでもらうことができました。

私はあいかわらず虫が苦手です。でも、虫をがまんしても畑に行きたいです。だって、おいしさを作る仕事ってたいへんだけどすてきだなと思えたからです。私はこの一年間で、農業科がすごくすきになりました。

農業と笑顔

慶徳小学校 六年 石田 あめり

「よろしくお願いします。」

みんなの元気な声が田んぼにひびきました。今年もまた、

田植えが始まりました。苗の束を手にして水田に足を入れました。とても気持ちいいです。わたしはいつもこのしゅん間が好きで、田植えを楽しみにしているのです。足がよごれるとか、気持ち悪いという人もいますが、私はちがいます。はだしで田んぼに足を入れると、大地と自分がひとつになったように感じます。自分が大昔にタイムスリップしたように感じます。苗についている根は、とてもじょうぶで、四月にまいた種とは思えないほどの生長が感じられました。

「苗は三から四本に分けて、根より少し上を持ちます。」と支えん員さんに教えられて始めました。田んぼにかかれた十字の印にどんどん植えていきました。しかし、と中で、「あなたは、もう少し下を持つて。」

と支えん員さんに注意されました。わたしは、少し勢いが止まりました。やる前に、終わったらもう一列できると言われていたので、わたしは早くどんどんやつてしまおうと思っていたのです。このあせる気持ちがいけなかったのかと思い、しえん員さんの注意を頭におき、今度は苗の持ち方に気をつけて、続けていきました。足や手、顔にまでドロがつきました。服だつてよごれました。でも、わたしは逆にうれしい気持ちになりました。後ろを見るたびに達成

感が生まれ、ドロだらけの自分からは、一生けん命やったという満足があふれました。わたしは、田植えをしているみんなが笑顔になったような気がしました。みんなで協力して植えた苗はともいきいきと生きていました。

農業は時間もかかり、めんどろな手作業も多いです。また天候に左右される中で命を育てあげるのは大変です。でも、自分の手で食料を生産する農業は、人間に笑顔や達成感を与えてくれると私は実感しました。

農業のすばらしさ

加納小学校 五年 原 太一

ぼくは、この一年間農業を、やってきました。そしてこの一年間を通して強く学んだ事は、農業のすばらしさです。わけは、二つあります。

一つ目は、農業科のすべての授業が終わった時に、「人の役に立てた」とか「農業は、いいものだ」と言う気持ちが出たからです。始めの時、「農業なんか、やってもなにもいい事なんてない」などと思っていました。でも、や

っているうちに楽しくなり、終わった後には、「もっとやりたかったなあ」と思っていました。「農業はいいものだ」と最後には感じられていて、農業はすばらしいと思えるようになりました。

二つ目は、笑顔を見られるからです。自分たちで育ててきたお米からもちを作って、おうちの方や、地いきの方などに食べてもらいました。そして「このおもち、おいしい」と言われ、たくさんの人に笑顔が生まれていました。

その後その米で赤飯をつくり一人ぐらしの方に、赤飯を配りました。その時、元気のなかった顔が急に元気になって温かいお言葉をもらいました。

そして、ぼくは、こう思いました。

「自分たちで育てたもち米で作った料理であんなにも喜んでもらえるなんて、すばらしいものだ。」と。

農業で、苦ろうすれば、温かいお言葉をいただいたり、収かくしたものを味わったりして農業のすばらしさが分かります。これからの農業の学習に役立てていきたいと思えます。また、ふだんの生活の中での「食べる」ということに気をつけて食べていきたいです。

ぼくが感じたこと

堂島小学校 三年 塚原 凜

三年生になって、はじめて、田うえの後のじよ草といねかりの後のだっこくをやりました。今のうちに、さいしんのきかいで全部をやるわけではなくて、昔の時代の木でできたきかいを使ってやりました。

まず、じよ草をやってみて思った事は、すぐくむずかしいという事です。いねといねの間をおして転がしていくだけだけど、すぐく重くて前にいくのもやつとで、それだけじゃなく、まっすぐに進ませるのも思うようにいかなくて大へんでした。

そして、いねかりの後のだっこくをやってみて思った事は、力があるなあという事です。六年生が足でふんだだっこくきかいを回して、ぼくが持っているいねからもみだけを落としました。ぼくはいねを一たび持っているだけだったけど、引きずりこまれそうになって大へんでした。

ぼくのおじいちゃんの家でお米を作っているけれど、全部きかいでやっているからこんな大へんだとは思いませんでした。

ぼくは毎日お米を食べて、お米があるのはあたり前だと

思っていた事に気がつきました。ぼくだけじゃなくて、日本人にとってお米があたり前になっているのは、むかしの人がどんなに大へんでも生きるために一生けん命お米やさいを作ってくれて、それが今でもつづいているからだと思いました。

何百年も前からお米やさいをあたり前に作りつづけていているって、本当にすごい事だと感じました。

ぼくは、農業科の活動を通して、いろいろなことを考えることができました。今年の米づくりは、終わってしまいましたが、来年やるときは、今年感じたことを思い出しながら活動したいと思います。

農家の人に感謝を

塩川小学校 六年 進藤 綾乃

待ちに待った大豆を収穫する日がやってきました。

塩川小の六年生は、農業科の学習で大豆を育てました。草をむしたり、水やりをしたりして育ててきました。鳥に食べられないよう、ある程度育つまで、ポットでカバー

をして育てるなど、工夫をして大切に育ててきた大豆です。ついに収穫の時期です。

大豆の茎は思っていたより小さくて、私のひざ位しかありませんでした。さやは、細かい毛が生えていて、茶色がかっていました。

初めは、一つ一つさやから豆を取り出していました。でも、その作業が細かくて、面倒になつてきました。友達と「面倒くさいねえ。どうしたらもっと簡単に取れるんだろうねえ。」

などと話していたら誰かが、豆を簡単に取り出す方法を発見しました。

「うわお、たたくとめっちゃ取れるぞ。」

と言いながら、地面で大豆の茎をたたいていました。地面には、たくさん大豆が出てきました。

「へえ、すごいねえ。」

「だねえ。」

「やってみる？」

「やってみよう。」

と、私達もその方法でやってみました。そしたら、ものすごく楽で、たくさん大豆を取り出すことができました。

一つ一つ取り出すよりも、効率がよかったです。

収穫が無事終わり、私は一つ思ったことがありました。『農家の人って大変だなあ』

私は今まで、食べ物好ききらいがたくさんあって、作物を作ってくれた人のことなんて考えてもいませんでした。でも、農業科の学習を通して作物を作るのは大変だということ学びました。これを機会に、農家の人に感謝をして、好ききらいを減らせたいと思っています。

のうぎょう大好き

駒形小学校 三年 大石 舞花

私は小学校に上がるまで、のうぎょうは、おじいさんやおばあさん、大人がやる仕事だと思っていました。でも、学校でのうぎょうの学習をして、のうぎょうは子どもでもできるんだ、楽しいしやりたいと思うようになりました。

学校でのうぎょうの学習をして楽しかったことは、えだ豆をしゅうかくしてえだ豆むしパンを作ったことです。たねを植える時は、えだ豆ってこんなたねなんだと思いました。くきがえだのように太くなり実がふくらみ、しゅうか

くした時には、色々な虫がいてびっくりしました。その時はじめてアブラムシを見ました。すごく小さくておどろきました。

むしパンをむしている間、ゆでたえだ豆がおいしそうだったので、私のくせが出てしまいましたはずかしいと思いました。でも、むしパンがむし上がった時は、いいにおいがしたけれど、まだ食べてはいけないと自分に言い聞かせ、ぐつとがまんしました。そして、一こだけ食べてのこりは持ち帰り、家ぞくに食べてもらいました。すると、おいしいとほめてくれました。

学校でえだ豆のたねを植えた時、家でも何か育ててみたという気持ちかわいてきて、おばあちゃんのお姉さんに、何かの野菜のたねがほしいとたのみ、ささぎのたねをもらいました。その時、おじいちゃんが言いました。

「舞花が何かを育ててみたいなんて、えらいじゃないか。大事に育てるんだよ。」

私は、大事に育てようと思いました。そして何カ月かたち、おばあちゃんが、

「ほれ、舞花。ささぎの実、なつてつぞ。この実が茶色くなつたらむくんだよ。」

と教えてくれました。実が茶色くなってむいてみると、き

れいな赤い実が出てきました。今度またささぎを植えてみたいと思いました。

私は、のうぎょうが大好きになりました。これからどんなのうぎょうの学習をするのかますます楽しみになりました。

初めての農業科

熊倉小学校 四年 赤城 はるか

わたしは二学期から熊倉小学校に転校してきました。そのため、育てている野菜のことや農業科のことは知りませんでした。

わたしは地域のしえん員の方々に教えてもらい野菜を育てる勉強があることを初めて知りました。農業科で何をするのかよくわかりました。十一月初めてしゅうかくしたのが人参でした。とてもりっぱでスーパーに売っている人参よりもりっぱでした。しゅうかくする直前に楽しみだなあと思つてぬいてみたら大きくていろんな形をした人参がいっぱいでした。しゅうかくした人参は畑の近くの川であら

農業に感謝

駒形小学校 五年 小滝 諒真

いました。あらった後の人参はきらきらとかがやいていて、ますますおいしそうに見えました。農業科ってこんなに楽しいのかと思いました。そのとき農業科のことをもっと知りたい、わたしも種をまくところから農業科をやってみたいと思い、このころから農業科が楽しくなりました。

九月わたしは初めて熊倉小でとれたえだ豆を食べました。わたしはうきうきしてえだ豆を食べました。あまい！と心の中でさけびました。どうしてこんなにあまいんだろう。

どうやって育てたんだろう。家でも育てたい。と心の中で言いました。気づいたらえだ豆をいっぱい食べていました。えだ豆はすぐなくなりました。その時わたしは命を感じました。こんなにおいしいということは命をいただいているということ。わたしは気づきました。今まで命をいただいているということを気にせずに食べていました。命って本当に大切なものなのだとわたしは改めて感じました。なので、わたしは給食や朝、昼、夜ご飯を毎日できるだけ残さないで食べるのを目標にしています。

それぞれの野菜ひとつひとつに大切な命があります。その大切な命をいただくので、どの野菜もあまくておいしくて、おなかもちもみたくしてくれるのです。農業科は私にそのことを気づかせてくれました。農業科大好き。

ぼくの家では、米作りをしていて、田植えをする時に使う苗箱を洗ったり、田植え機が通ってタイヤの跡が付いた所を、エブリという物で平らにすることをやったことがあります。でも、学校は手植えなので、ドキドキワクワクしていました。

楽しみにしていた田植えの日、駒小の田に第一歩をふみ入れました。その土は、まるで足にすいくような感覚でした。土は下の方になるほど冷たくて、気持ちよかったです。歩いているとなにやら、

「ブクブクブクブク。」

と音がしました。

足もとを見ると、水の中からアワが出ていました。そして不思議そうにしていたぼくに、農業科支えん員さんが、

「これはね、メタンガスっていうガスなんだ。メタンガスは、苗の根に悪いえいきょうをあたえるんだよ。」

と、教えてくださいました。

それを知ってぼくは、意識して足をふみこみガスをぬきました。友達もわけを知って、みんなでガスをぬきました。

初の米作りを成功させたいし、学校のみんなや先生、地域の方にも、おいしい新米で作ったカレーを食べて、笑顔になってほしいから、がんばりました。

やがて秋になり、収かく祭の日がきました。一生けん命育てた野菜や新米を使って一生けん命にカレーを作りました。すごくおいしいなどの声もあがったので嬉しかったです。

最後にカレーを食べてもらった地域の人に会津めでたを、歌ってもらいました。その地域の人は、

「おいしいカレーをありがとうございます。」

と、ぼくたちに感謝の気持ちをもって言うてくださいました。こんなに時間をかけて作ると気持ちやありがたみがつたわるんだなと思いました。だから、ぼくたちも本当に農業科支えん員さんと野菜、新米に感謝です。

食べ物大切さ

駒形小学校 六年 五十嵐 千冬

私は、今年、小学校最後の米作りに農業科の学習で取り

組みました。その中でも、最後の活動、稲刈りでは、これまでの活動のことを思い出しながら一生懸命活動しました。そして、この活動で、一粒一粒の米を大切にしなければならぬと本当に思いました。

十月中旬、稲刈りの日がやってきました。私は、どのくらいお米が取れるのか楽しみでした。田んぼに行ってさっそく稲を見ると、きれいな黄金色をしていました。見ただけで、「この米はおいしい」と感じました。そして、稲刈りがまを持って稲刈りをしました。

稲の株をもってカマで切ると、ザクツと気持ちのよい音がしました。その株を四つくらい集めて一つの束にしました。この作業をずっと続けました。みんなで協力してどんな束ができていき、やっと全部刈り終わりました。

次に、稲の束を逆さにして干しました。自然の力でかさそうさせ、おいしくするためです。その作業をしているとき、稲を刈り終わった田んぼにたくさんのお米が落ちてくるのに気づきました。すると農業科支援員さんが、

「落ちている稲の米も食べられますから、拾ってください。」

と言っていたので、私もがんばって拾いました。たくさん拾えたので、お米の命を助けた感じがしてうれしくなりま

した。最後の米作りがうれしい気持ちで終わることができてよかったと思いました。

私は、農業科の学習で米作りを通して、一粒一粒のお米を大切にしなくちゃいけないと改めて感じました。だって、その一粒一粒に、作った人の思いがたくさんつまっているからです。お米だけでなく、他の食べ物だってお米と同じで大切に作られています。だから、生活の中で食べ物を大切にすることはとても大事なことだと思いました。

二年間の農業科の活動は、私に食べ物の大切さを教えてくれました。

収かくの喜び

第一小学校 五年 鈴木 秀隆

今年の農業科で育てたのは、お米です。田植えと稲かりを体験しましたが、どちらも初めての体験で、すごく楽しかったです。でも、その中には、多くの苦労があることも知りました。

一言で「田植え」と言っても、その前には良い種を選別

したり、その種を箱にまいたり、代かきをしたり、たくさんの仕事があるのです。田植えだって、昔は全て手作業でやっていました。こんな大変な仕事を、ぼくはあまりやりたくないなあ、と思っていました。一年間仕事は山積みなのに、よく続けられるな、とも思いました。

でも、稲かりをやった時、考え方は一変しました。稲があった時、自分たちが植えた米を今、収かくしているんだなと思うと、とても嬉しい気持ちになりました。この時ばかりは、この喜びを味わえるから農業を続けられる、と分かりました。苦労した分喜びも大きい、とも思いました。稲の世話は支援員の方に任せていたけれど、今度、自分の手で世話をして、収かくをしてみたい、と感じました。そうすれば、収かくの喜び、それを食べる時のおいしさ、それがもつと感じられると思ったからです。

米といっても、種類はたくさん、数え切れないほどあります。でも、共通して言えるのは、米にはそれを育てた人の気持ちが入っていることだとぼくは思います。育てる時の苦労、収かくの喜び、そういう物もあって米となるのです。お米を食べる時、農家の人たちの気持ち、それを考えて食べる、それが自分たちにできる農家の人たちへのおんがえしだとぼくは思います。

田植えと稲刈りを通して学んだこと

上三宮小学校 五年 川勝 愛斗

「明日は田植えをやります。」

ぼくは、これを聞いてがっかりしました。ぼくの家では田んぼを作っていません。それに、今年の四月に転校してきたので、初めての経験だったからです。

どろの中に入るのはいやだなあと思いながら、農業支援員さんの説明を聞いていると、最初は筋引きという作業でした。六年生のやつているところを見て

「うわ、めんどくさい。」

と、思わずさげんでしまいました。

五年生の番が来て田んぼの中に入ると、足が進みにくくてイライラしました。でも、支援員さんに、コツを教えてくださいましたら、上手にきれいに引けました。苗植えの時も、さつきつけた筋が交わっているところにきれいに植えたら、支援員さんに、

「上手だね。」

と、ほめられてうれしくなりました。

十月には稲刈りをしました。稲刈りもちろん初めてでした。支援員さんに、

「下から二、三センチメートルの所から、切るんだよ。」

と教えていただきました。その通りに切ったら、きれいに刈ることができました。それを見ていた支援員さんから、

「上手だよ。そのままがんばって。」

と、ほめられてとてもうれしくなりました。

十一月には、収穫祭をしました。ぼくたちは、芋汁とおにぎりを調理しました。

支援員さんや地域の方々に、

「おいしいよ。」

と、たくさんおかわりをしていただいてよかったと思いました。

自分たちで育てたお米と里芋で調理したおにぎりと芋汁は最高でした。とてもとても楽しい収穫祭でした。

初めはいやだった農業科の勉強も、支援員さんのおかげで、とても好きになりました。

来年の農業科が楽しみです。



心をこめて農業を

第三小学校 五年 山 凜太郎

ぼくの学校では、毎年五年生が米づくりをすることになっています。今年、いよいよ自分の番になり、初めて米づくりをしました。ぼくの家は農家で、米を育てているので、米の事ならよく分かるぞという気持ちで始めました。

最初は種まきです。ぼくは、田植えなどの手伝いはよくするけれど、その前の作業はあまり手伝ったことはなかった。種まきから始めることに驚きました。だいたい二週間もすると、小さな芽がたくさん出てきました。とてもかわいかったです。それを見て、米づくりをがんばりたいなあという気持ちがわいてきました。

田植えは手で行いました。いつもは機械でやるけれど、はだしになって、みんなで一カ所に三本ずつ植えました。稲の苗はまだ細くて弱々しい感じがしました。

今まで、登下校中に田んぼを注意して見たことはありませんでしたが、今年は毎日田んぼを見ました。種から芽へ、芽から稲へどんどん成長していることがびっくりしました。ぼくは毎日、「お米に早く大きくなってね」と声をかけました。

八月になり、おじいちゃんに、

「もうすぐ、稲の花がさくぞ。」

と言われ、毎朝観察に行きました。ある日、とうとう咲いた花を見た時には、うれしくてやったあという気持ちになりました。

米作りの中で、田植えや稲刈りが終わった後は、ぼくはとてもやりがいを感じました。毎日「見て」「声をかけて」「いたことで、自分が心をこめて育てたぞ、という気持ちが大きかったのだと思います。農家の人たちも、いつもこういう気持ちになっているのかなあと思いました。

育てたお米を食べた時は、やっぱり心をこめて育てるとおいしいと感じました。作ったかいがあったと思いました。これからも、心をこめて農業を続けていきたいです。

最後の一粒まで感謝して

関柴小学校 六年 山田 涼心

「ご飯粒は、最後の一粒までしっかり食べなさい。」夕食の時間母に言われました。その理由が分かりませんで

したが、関柴小学校の五、六年生で行う米づくりの時に、支援員さんに教えていただきました。

「お米は、日本人の主食です。日本人の中には、お米を食べたくても食べられない人たちがたくさんいます。だから、今君たちはお米を食べて生きていることに感謝をしなければいけません。」

私たちは、日本人の主食「お米」を、苗植えから稲刈りまで行いました。家が農家でない私は、去年にひき続き二回目です。素人の私ですが、みんなと一緒に泥だらけになりながら五月に田植えを行いました。三本くらいずつ、束にして間かくをとりながら、ていねいに植えました。夏休み中も、支援員さんの方にお世話をしていただきました。そのおかげで、たくさんのお米ができ、十月には稲刈りを行いました。かまで稲の下のを刈りました。太い束や細い束など手作業らしさがでていて、稲刈りの時間が楽しくてあつというまでした。そのお米を、収穫祭で炊いておにぎりにして食べるのがとても楽しみです。

私は米作りを通して、今お米を食べて元気に生きていることに感謝をしなければいけないということを実感することができました。

お米を食べたくても食べられない人たちは、日本中にたく

さんいます。

「ごちそうさまでした。今日のご飯もおいしかったです。」

今私は、毎日最後の一粒まで感謝してご飯を食べています。

作物との出会い

熊倉小学校 六年 伊藤 来麗愛

私が三年生のころは、あまり関心を持たずにやっていた農業科。それが、いつのまにか興味を持ち、楽しくできるようになっていました。それは、どうしてでしょう。

一つは、作物との出会いだと思います。畑仕事を始めたとき、最初は畑に行くのがめんどくさいと思っていました。でも、水やりや草むしりに行くと、畑の作物が、どんな大きくなって、時にはしおれていたり、花を咲かせたりする姿を見て、何だかその作物が、自分の大切な仲間のような気がしてきたのです。だから、心をこめて、一生けん命育てることが出来ました。

もう一つは、感動することができたことです。私は、収

穫している時に、心の底から感動しました。初めは、ごく小さな種だった作物が、とつても大きく成長していたからです。

「こんなに大きくなってる！」

「おもしろい形だね。」

「早く食べたいよぉ」

と、サツマイモ、キュウリ、カボチャ、トマト：などを収穫した時の感動は、六年生になった今でも、わすれられませんが。

そして、さらにその私達が作った作物を、いろいろな人に食べてもらって、そこから笑顔が生み出されるのを見て、すごうれしかったです。がんばって作って良かったなあ、と達成感を味わうことができました。

三年生のころ、農業に関心を持たなかった自分に、ちよつぱり後悔しています。だから、私と同じような人がいたら、しっかり教えてあげたいです。

「農業科を通して、いろんなことが学べるんだよ。作物といっしょに、自分も成長していけるんだよ。」

はじめての大根作り

加納小学校 三年 原 武

ぼくは、今年のはじめてのうぎょうのべん強をしました。いつもは、おばあちゃんを作っているのを見てばかりでした。でも、今年はおいしい野菜を自分たちでそだてるのできどきしていました。

ぼくが心にのこったのは、大根の世話とせい長でした。

まず、九月九日にたねまきをしました。たねは赤くてホウセンカのたねのようでした。ぼくは、大根がでかいからたねもでっかいと思っていました。たねをうえるときは、たねとたねの間を三十センチほどあけました。およそ三週間がすぎて、芽が出ました。芽は、小さくてかわいかったです。芽はどんどん大きくなっていきました。すると芽に虫がついて、今度は虫取りのさぎょうをやりました。葉のうらに、毛虫や、ハエや、ナメクジや、青虫がいました。ぼくは、きもちわるい虫はにがてでした。けど、がんばってやってみました。先生がオレンジ色と黒の虫はいい虫だと教えてくれました。

どんどん日がすぎて、十一月にしゅうかくさぎょうをしました。大根を真上からぬくとでっかい大根が土から出て

きて、びっくりしました。次にぬいたのは人間の足みたい
な、おもしろい形の大根でした。あらうどうぐはわらで作
ったたわしです。こまかいよごれまではとれませんでした。
さいごの仕上げは、たわしでやりました。どんどんくる大
根をていねいにすばやくあらいました。そのとちゅうに、
先生が切ってくださいだった生の大根を食べました。あまくて
とてもおいしかったです。全部の仕事が終わったときに心
の中で、

「たいへんだったなあ。」

と思いました。

はじめて大根を自分で育てて、ぼくは、おばあちゃんの
たいへんさがすぐわかりました。これからは、べん強し
たことを生かして、おばあちゃんの手つだいをしたいです。

農業活動を通して

塩川小学校 四年 平宮 蒼唯

わたし達四年生は、今年農業科活動でかぼちやを育てま
した。食べられるかぼちやも作りますが、ジャンボカボチ

ヤにも、ちょう戦です。四年生のみんなと、一生けん命育
てました。カップへ、土と種を入れて、水をかけてめが出
るのをわくわくしながら待っていました。いよいよ、めが
出たので、苗を畑に植えました。それから、そう合の時間
に、草むしりや、苗の手入れ、水やりに行きました。どん
どんつるが横へ横へのびて、葉っぱとくらべると小さな黄
色い花がさきました。手のひらより少し大きな葉っぱが太
陽を向いていました。

夏休み、農業科支えん員さんが、草むしりや水やりなど
のサポートをしてくれました。夏休みが明け、じゅ業で畑
に行くとき、花はなくなつるがくるくとまきついていて、大
小さまざまなかぼちやが実っていました。

いよいよ、しゅうかくです。かぼちやのとり方を、先生
から学びました。わたしもかぼちやを持ち、しゅうかくし
ました。かぼちやから、みずみずしい汁が出ていて、とて
も、しんせんさが伝わってきます。緑や、オレンジ色のか
ぼちやが、二十こくらいは、とれたと思います。

いよいよ調理の日、わたし達は、かぼちやケーキと、茶
巾を作りました。はんのみんなで協力して、工夫をしながら
作りました。出来上がりに、支えん員さんをまねき、感
しゃの気持ちをこめて、いただきました。わたしは、かぼ

ちゃんは苦手でしたが、みんなで育てたかぼちゃは、とてもおいしく感じました。

農業活動を通して、成長を待つ楽しさや、友達と協力する大切さを学びました。

みんなでやりとげた米作り

塩川小学校 五年 目黒 楓香

私達、塩川小学校の五年生は農業科で稲を育てました。私達の田んぼには、虫や草など自然がいっぱいでした。私は田植えのことを何も知らなかったので、ワクワクする気持ちもあれば、少しだけ心配な気持ちもありました。

支援員さんに田植えのやり方を教えてもらい、私達の田植えが始まりました。田んぼの中に入ると、なんだかグチャグチャして足に変な違和感を覚えました。なえを植えて前に進むうとすると、足がぬけなくなったり、あせって転びそうになったりしました。そんな私に優しく手をとってくれたのは、支援員さんでした。

「うまく足をぬくには、かかとを上げてからぬくといいで

すよ。」

と教えていただきました。

田植えが終わると、ときどき観察しに行くことが多くなりました。田んぼに行くたび、みるみると大きくなっていました。みんなでとどく所まで草むしりをするなど自分達でできることは全て進んでやりました。稲は、その苦勞を分かっているかのように育ち、やがて、色が緑色から黄金色に育っていきました。

そして、十月半ばに稲刈りがありました。苦勞のあかしの稲を刈りました。その後に、コンバインを使い、だっこをしました。稲の束はとても重かったです。支援員さんが

「米一粒も残さないようにしてください。」

とおっしゃっていたので、落ちている稲穂を拾いました。つかれたけど、収穫の喜びが感じられました。

私は、今回の米作りでお米の大切さと、農業の苦勞を学びました。友達と力を合わせて一つのことをやりとげる喜びほど、うれしいことはありません。食材の命があつて、人の命があります。今、主食は、パンが多いですが、私達にできることは、お米一粒一粒を大切にしていくことだと私は心から思います。

感謝の言葉 「いただきます。」

山都小学校 六年 田代 萌衣

「いただきます。」

この言葉から私は、

「いただきますってどんな意味だろう。」とき問を持ちました。私は、スイカをこの夏に育てました。小さな種からはじまりました。私たちの力じや育てられず町の農家の方といっしょに育てました。夏休み前にスイカを収かくしました。あんなに小さな種からこんなに大きなスイカになるなんてビックリです。

収かくのときにスイカにわらがかぶせてありました。これは農家の方がやってくれました。

「だからこんなに見事なスイカになったんだ。」

みんなで喜びました。この時に、農業を通して、分かったことが一つありました。それは農家の方達が、苦勞して作ったものを私たちは食べさせてもらってるのだから「いただきます。」と言つて農家の方に感謝するんだと分かりました。他にも、さといもやじゃがいもも収かくしました。農家の方の手を借りず、私たちで収かくしました。みんな汗が出て大変でした。でも楽しかったです。

これから私は作物を育てる農家の方や作物をいただく感謝の気持ちを忘れずに、「いただきます。」を言います。給食も残さないで食べたいです。農業を通して、作物への感謝の気持ちやみんなで協力して作業する団結力などがわかりました。下学年にも農業の大切さ、作物やそれを育てる農家の方達への感謝の気持ちを忘れないで食べようね、ということ伝えてたいです。最後の農業体験はとても良い思い出です。一生忘れないでいたたいです。

おいしい大豆に感じやして

第一小学校 三年 大八木 壱征

ぼくの家は、のう家です。家族みんなでお米も野さいもくだものも作っています。おじいちゃんもおばあちゃんもお父さんも、のうぎょうのプロです。お母さんは、野さいやお米をりよう理してくれるプロです。ぼくと弟はお手つだいのプロです。ぼくにとってのうぎょうは、家族と同じです。毎日食べている食事は、家で作ったお米や野さいです。作物に感じやして物の命を、

「いただきます。」

「ごちそうさま。」

と言うのだと教えてもらいました。学校に今まで一度も休まないで行けているのは、家族と家族の作る作物のおかげです。

三年生になって、学校のじゅぎょうで大豆を育てました。たねから育てたので大豆になるまでとても長かったです。水やりをするたびに大豆が大きくせい長していてうれしかったです。十一月十八日にしゅうかくをしました。とても大きくなっていてびっくりしました。くきごとかわかすのにならべたらとてもいっぱいで、どれだけ大豆がとれるのか楽しみになりました。

家族に、学校で大豆を育てている話をしたら、お母さんが大豆入りのおにぎりを作ってくれました。とてもおいしくてうれしい気持ちになりました。

「おいしい。」

とぼくが言ったら、

「学校のもみんなで育てたからぜったいおいしいよ。」

とお母さんが言いました。

「そうだね。」

とぼくも言いました。

家族にも学校のみんなと育てた大豆を食べてもらいたいなと思いました。どんな味がするかとても楽しみですが、どんな味でも、ここまで大きくなり、たくさんとれた大豆に感謝していました。

野さい作りで感じたこと

第一小学校 三年 柳沼 陽斗

三年生になって、ぼくたちの学年は畑で大豆を作ることになりました。ぼくは、えだ豆は食べたことがあるけれど、大豆はどうやって食べるのか想ぞうできませんでした。

大豆作りを教えてくださいるのは、とよこさんです。二年生でさつまいもを作った時に教えてくれたのも、とよこさんでした。とよこさんからいろいろ教えてもらったおかげで、大きくてあまいさつまいもができました。しゅうかくしたさつまいもで作ったスイートポテトは、とてもおいしかったです。今年も、大豆のなえを植える時に、とよこさんが来てくれました。とよこさんからは、「なえを植える時に、なえについている黒い土がかくれるように土をかぶせてく

ださい。」などたくさんのことを教えてもらいました。と

よこさんは、のうぎょうのことなら何でも知っています。

ぼくも、今年の夏、庭でトマトやキュウリ、ズッキーニを育てました。ズッキーニが大きくならなかったり、トマトがなかなか赤くならなかったり、育てるのはむずかしかったけれど、自分の家の庭で育てた野さいを家族で食べて、「おいしいね。」と言われるのがうれしかったです。

十一月十八日、ぼくたちは大豆をしゅうかくしました。しゅうかくする時、大豆はぼくのかたまで育っていました。ね元の方を引っぱって、ねっこからぬきました。ぼくは、三本ぬきました。一りん車で運び、オープンスペースにならべてほしました。

大豆をどうやって食べるのか、まだ分かりませんが、ぼくは今からとても楽しみです。そして、もっといろいろな物を育てたり、食べたりしてみたいと思います。



農業科、ばんざい！

上三宮小学校 六年 大塚 桃佳

私は、一年生の時から、学校で農業科の学習をしています。野菜を育てたり、お米を育てたりしています。六年生では、二つの野菜を育てました。一つ目は、じゃがいもです。五月に種いものうえつけをし、九月に、収穫しました。大きいサイズと小さいサイズ、割れているの、くさっているじゃがいもに分けました。くさっているじゃがいもと一緒においておくと、となりのくつついているいももくさってしまうと、おじいちゃんから聞きました。二つ目の野菜は大根です。九月に種まきをしました。とても小さい種でした。三つ、四つくらい入れました。水くれをして大きく育つようになったらいいなと思いました。去年、さといもを作った時は、水くれを忘れる人がいました。あまり、水の大切さをみんな思っただけでなかったのです。だから、今年はもう少し水をやらないか、と思いました。去年の反省を生かして、私は水くれを、みんなに呼びかけました。そしてクラスみんなで水くれをがんばりました。大根は、十一月に収穫しました。よく見る大根の大きさよりは、小さかったです。でも、洗うと、真っ白でした。葉っぱは、すぐに

折れそうなくらい、青々として、みずみずしかったです。学校の収穫祭では、とん汁に使うことになっていました。

合わせて、他の学年がつくった野菜も入れて、具たくさんのおとん汁になるのかと、洗いながら私は思いました。

収穫祭当日、とん汁作りのため、農業支援員の方とつくりました。とん汁と、学年でとれたじゃがいもで粉ふきいもをつくり、会食の時に、テーブルごとに分けました。水くれとか育てる時は、大変だったけど、みんなと食べられ、自分でつくった野菜を、おいしく食べることができました。小学校での農業体験は、大人になっても、とても役に立つと思います。土でよごれても立派に育つ作物を収穫する楽しさを体でしっかり覚えられたからです。農業科、ばんざい。

これまでの農業科・・・

豊川小学校 六年 茶木 真由花

今年も「農業科」の学習がスタートしました。六年生になって少しは慣れてきているかなと、少しの自信はあった

ものの、やっぱり「だいじょうぶかな。」という不安がありました。最初の米作り作業は、種もみまきです。

去年やったことを思い出しながら、ていねいに作業をしました。土を平らにすること、箱にまんべんなくまくこと、水をやるときはぼたぼたにならないようにやさしくあげること・・・などを思い出して、班のみんなと協力しながら進めました。

次は田おこしです。去年もくわを使って耕すのが大変で、次の日筋肉痛になった記おくがありました。やっぱり今年も大変でした。「作物は土づくりが大事」ということを、農業支援員の只浦さんに教えてもらっていましたが、やはり簡単ではありません。班のみんなと力を合わせて、なんとか乗り切ることができました。もちろん、次の日からは筋肉痛でした。

その後の田植え、イオン水散布と草取り、かかしづくりなど、昨年の経験を生かして、五年生と協力しながら楽しく活動に取り組みました。わたしが今年一番心に残った活動は、何と言っても「稲刈り」です。あいにくの雨の中で、の活動になりましたが、福島県知事さんがいらっしやって、一緒に稲刈りをしたのです。その時の様子がテレビでも流れていて、とてもびっくりしました。とてもすてきな思い

出になりました。

今年の米作りは、わたしにとっては二回目です。コンクールで金賞をとれたことで、芸能人のＴＯＫＩＯにも会うことができました。でもそれよりも、みんなで力を合わせてがんばってきて、今年もおいしいお米ができたこと、只浦さんや小林さんなど、支援員の方々に力をいただいたことが、何よりもうれしいことです。二年間農業科の学習で学んだことを忘れずに、これからいろんなことにチャレンジしていきたいと思います。

農業の楽しさ

豊川小学校 六年 小森 奏

昨年度、ぼくたち豊川小は、米・食味分析鑑定コンクール世界大会で金賞を受賞しました。金賞といっても第三位。今年こそは一位を目指そうと、張りきって農業科の活動を始めました。

米作りの一年間の活動はあつという間で、昨年と何か変わったことがあったかなと考えると、特に変わったことは

ないように思えました。田植えで田んぼに入った時の感じよくは、相変わらずぬるぬるで気持ち悪かったし、イオン水散布だって、相変わらずくさかったしで、作業をしてみて特に変わったことはなかったというのが、正直な思いです。さぼったり、やる気がなかったわけではありません。作業に慣れてきたのかもしれませんが。

でも、去年とは明らかに違うということが、確かに一つあります。それは「人との関わりが多くなった」ということです。

今年は、ジャニーズのＴＯＫＩＯと、福島県のお米のＰＲのために、ＣＭに出ることができました。その撮影の時、びっくりするほどの人がいて、それはすべて撮影のスタッフさんだったのですが、いろんな人たちと話をすることができました。また、稲刈りでは、福島県知事さんや市長さん、教育長さんと一緒に活動することができました。雨の中ででしたが、みんなで力を合わせてしっかりと稲刈り作業ができました。いろんな人たちと関わって作った今年の米です。これまでぼくたちを指導してくださった、只浦さんや小林さんとの関わりもあります。絶対金賞をとれるという自信がありました。

そして十一月、今年も金賞受賞、さらに今年は第一位と

いう知らせが届きました。その時、教室が喜びに包まれました。ぼくたちをこの喜びに包んでくれたのは、米作りという農業科学習だと思います。ぼくたちに喜びをあたえてくれた只浦さんに感謝をし、農業科に感謝をすることで、農業科の楽しさを知ることができるのだと思います。

農家の人の素晴らしさ

姥堂小学校 六年 新國 恋羽

「恋羽、畑仕事手伝って。」

「えー。いやだなあ。」

私の家は、田畑を耕している農家です。畑の水やりをする時や、苗を植える時、「手伝って。」と、よく言われます。以前は、やりたくない気持ちの方が大きかった私でした。

学校の農業科の時間、マルチがけをしました。二人でやったけれど、マルチは曲がるし、とても大変でした。しかし、農家の人は、一人でマルチがけをやっています。それを考えてみると、「すごいなあ。」と思います。

夏休み前までは、農業科の時間に草むしりをしていたの

で、あまり草は生えていませんでした。しかし、夏休みをむかえ、畑に來てみると、

「スイカが虫に食べられてる。」

「草がたくさん生えて、ジャングルみたい。」

元の姿にもどすのは、とても大変でした。毎日お世話していれば、こんなことにはならなかったと思います。農家の人が、どれだけ大変な思いをしているか、よく分かります。今年収穫した野菜は、いもに会で食べました。どれも美味しく出来ました。とても美味しかったので、「作ったかいがあったな。」と思います。家ではあまり手伝ったりしないので、勉強になったことがたくさんありました。

今年で農業科も最後です。初めて農業科をやった時は、「やりたくない。」という気持ちがあったように思います。しかし、皆で協力して、作物を育てると、楽しく出来ました。農家の人の苦勞が農業科をやり、初めて分かりました。農家をやっている実家をとてほこりに思うようになりました。これからは、少しは、家の人が楽になるよう、手伝いたいです。



農業科の学習で学んだこと

山都小学校 五年 渡部 遥華

わたしたち五年生は、今年のかぼちゃを作りました。かぼちゃ作りで学んだことが四つあります。

一つ目は、畑にわらをしいて草を生えなくすることです。去年は、草がたくさん生えて大変だったけど、今年は、少しでも草は生えましたが、びっくりするほどわらのおかげで草が生えませんでした。どうしてわらをしくと草が生えないのか不思議に思って、先生に聞いてみたら、「草は日光に当たって成長するから、わらを使って日光をさければ草が生えないんだよ。」と教えてもらいました。

二つ目は、自分達で育てた作物が大きくなっていく喜びやおどろきを学びました。はじめに苗を植えたときは、手にのるくらいだったのに、百日ぐらいたつとつるがのびて葉も大きくなり、実もついて本当にうれしく思いました。水やりや、草をとる作業がとても大変でしたけど、大きく育ったのを見て、大変だったことを忘れるくらい喜びが大きかったです。

三つ目は、野菜を育てることはとても大変だということです。草とりや水やりもそうですが、収かくの仕方も、な

れないとむずかしいなと思いました。

四つ目は、作物を育てている農家さんへの感謝の気持ちです。給食で使われている野菜は、ほとんどが地元で作られたものです。暑い日も、雨の日も毎日手をかけて育てられている野菜なので、好ききらいをせずに残さず食べるようにしたいと思いました。

農業科の学習で学んだことを忘れないで、来年も頑張って野菜を作りたいと思います。



平成 28 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【特別審査員】

(敬称略)

関東学院大学教授
喜多方市教育員会教育長

佐藤 幸也
芳賀 忠夫

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長
喜多方市PTA連絡協議会長(堂島小学校 PTA 会長)
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所経営支援課長
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主任主査
JA会津よつば農業協同組合 いいで地区本部長
喜多方市小学校農業科支援員
喜多方市農業委員会委員
喜多方市産業部農業振興課長
喜多方市教育委員会学校教育課 主幹・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事

泉 光洋
真壁 健治
薄 真昭
大竹 一幸
富山 裕治
山田 義人
佐原 裕司
小汲 康浩
坂口 伸
小杉 一浩

編集後記

私が喜多方市小学校農業科に携わり、早4年の月日が流れようとしております。以前、喜多方市内の中学校に在籍していた関係で、喜多方市では小学校農業科を実施していることはわかっ
てはいたものの、教育委員会が主になってこれほどの実践がなされていることに驚いたことを今
でも鮮明に思い出します。

そのため北は北海道、南は九州など全国各地から毎年のように視察があり、喜多方市の小学校
農業科は、今や全国から注目されている活動と言えます。視察の皆さんは小学校農業科では、「児
童が農業を学ぶことにより後継者を育成するのですか?」「食育活動の一環ですか?」と思っ
ておられる方がほとんどで、農業科で「心の教育を育む」ことをお話しすると、この予想外の説明に
とても驚かれるとともに、小学校農業科のすばらしさを実感していただいております。

実は、この視察の時にお渡しするのがこの作品集なのです。この作品集はとてつもない説得力
があり、私がどれだけ、各小学校の取組の様子や先生方、支援員さん等との連携を説明するより
も、この作品集を読んでいただければ喜多方市小学校農業科のすばらしさが伝わるのです。この
作品集には、それだけの力があります。

最後に喜多方っ子のみなさん。小学校農業科は、これから厳しい世の中を生きていくうえで必
ず役に立ちます。喜多方市農業科での経験を誇りにし、今後の生活に役立ててほしいと思います。

(学校教育課 課長補佐・指導主事 小杉 一浩)

平成 28 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成 29 年 2 月 発 行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会